

夢サラダ Vol.60

2017. 1. 1 発行

市民活動の拠点を目指しています。
「今治市民活動センター」
指定管理者：(特非) 今治NPOサポートセンター
【お問合せ】TEL/FAX 0898-25-8234
E-mail imanpo@nifty.com

ボランティア活動の現状

“ボランティア活動”と聞いて、どんなイメージを持つだろうか？今治市民活動センターでは、平成12年のオープン以来、ボランティア活動の情報を提供したり、ボランティア希望者と活動現場のマッチングを行ったりしてきた。ひと昔前は、どちらかというと「特別な活動」というイメージが強く、活動に参加する人も限られていたように思う。年を重ねるごとに日常生活にかかわるすべてのことがボランティアにつながるという認識を持つ人が広がっているように感じている。活動分野も「保健・福祉」の分野のみならず、身近なまちづくり、教育・文化活動から、国際理解や共生社会の視点からの取り組みなど、実に多様だ。

今治市民活動センターには、現在、97 団体が登録し、多彩な活動を行っている。団体の規模は小規模が多く、任意団体の場合、構成人数「10 名～20 名」、年間予算「100 万円以下」の団体が一般的なことが特徴だ。人・資金の不足は団体が共通に抱える課題と言える。

そんな中、個人が持つ時間、そして技能や経験等を提供したいと願うボランティアとの出会いは、とても貴重な。昨今は高校生・大学生などの若年層の活動意欲が高く、メンバーの固定化や高齢化に悩む団体とのマッチングがうまくいけば、団体への大きな支援となる。

一つ一つの取り組みは小さいながら、地域に確実に根を張っており、活動の積み重ねの中で高い専門性を育んでいる団体がある。「大好きな今治市をもっと暮らしやすくしたい」、「たくさんの人との出会いがあり、学びの連続だ」と、当事者意識を持ってまちに関わる担い手の声は頼もしい。地域社会がどんどん身近になっていくことは、ボランティア活動に取り組む醍醐味と言える。

ボランティア・市民活動への理解を深め、活動を活発化させること。こうした平時の活動は災害への備えの充実強化にもつながる。活動を通して地域に新しい人間関係が生まれ、継続的に交流



つなげよう、キュ！

する関係を築いているからだ。市民団体の中には地域の中で孤立しがちな人々を支援する活動も多く、災害時の要援護者の把握と重なる面も多い。

昨今、重要視されているのが「受援力(じゅえんりょく)」という力だ。多様なボランティアを受け入れる環境や知恵を高め、上手にボランティアと寄り添う力のことだ。大規模災害が発生すると、多くのボランティアが全国から駆け付け、被災地の人たちとともに、さまざまな活動をする。まちの復興・再建のために必要不可欠なものとなっている。一方で、被災地での理解が得られなかったためか、ボランティアの力が十分に発揮できなかったとの反省の声が聞かれるのも事実だ。「無料で手伝ってもらうのは悪い」、「信用していいのだろうか」といった不安や戸惑いが背景にはあると聞く。

地震や大雨、台風など自然災害が多い日本。発生が懸念される南海トラフ地震。私たちのだれもが被災者となる可能性がある。被災地を支援したいというボランティアの力を借り、復興・再建に導くには、環境づくりが重要だ。平時の活動の活発化は自分の住むまちへの愛着を育んだり、課題解決への関心を高めたりするなど、自分たちの地域を自らの手で守る「自助・共助」の意識醸成にも通じるものだ。身近な活動へ参加し、人と人とのつながりを構築して欲しい。

高校生ボランティアの声を紹介

☆どんなボランティアがあるのかわからな

いため、行動に移せずにいた。参加してみて、小さな動きも役立つことを知った。

☆将来、地域活動に取り組んでいきたいと考えている。活動を通して、地域の人と交流し、人間関係を深めることができた。



イベントを手伝う
高校生ボランティア

NPO現場見学会 地域の防災力とは 市民トリアージの現場に密着！

平成 28 年 9 月 17 日(土)、ボランティア活動、社会活動をしたいと考える方を対象にした「NPO現場体験ツアー」を開催しました。自主的・自立的な市民の活動を知ってもらい、より多くの市民参加が拡がることを願うもの。それは市民が持つ経験・知識・技術をいかし、社会の「支え手」として活躍する人が増えて欲しいとの思いがあります。今回、訪れた「市民トリアージ研究普及会(以下、「普及会」)」はそんな思いにぴったりの現場です。



会場は今治市の防災用品専門店「安心堂」。1Fの店内には様々な防災用品が所狭しと並べられています。パン、保存水等の食品、暗闇の必需品のライトも多様、そして水を使わない手袋シャンプー、世界一小さな歯ブラシ等の衛生用品まで。新商品も続々出ているとのこと。ここで「普及会」が毎月1回、開催している「レディス・ママ防災カフェ」が今日の学びの場です。集まった参加者は 16 名。「レディス・ママ防災カフェ」にいつも参加しているという数名の女性、そして「普及会」のメンバーも加わり、総勢 25 名でスタートです。

「南海トラフ大地震での今治市の被害想定は？」。冒頭、「普及会」の砂田ひとみさん、伊藤雅章さんからこんな質問が投げかけられました。それぞれ考えます。死者 641 人、負傷者 4,662 人。そして避難者は 44,630 人(1週間後)！ そんな衝撃の数値は、後ほど教えていただきました。今治市全体の実に 1/4 以上が、何らかの被害を受けていることになります。この甚大な被害規模の中で、



非常時、一番困るのは、実はトイレ。ペット用トイレシート、キッチン用泡ハイターを活用した衛生的なトイレの紹介が。



肩をトントンするゲームでリラックスモードに。スムーズな自己紹介に繋がりました。



「安心堂」の2F に場を移し、自己紹介からスタートです。「小さな子どもを緊急時にどう守ったらいいのか？」という子育て中のお母さん、「地元・今治に残りたい。もしもの時に故郷を守るには？」と考える高校生。「学校で防災を学び、もっと知りたくなった」と答える小学生。参加者の顔ぶれは何とも多彩です。しかも大規模災害に備えるために、何ができるのかをそれぞれの立場で真剣に考えて、足を運んでくれていることが分かりました。



(参加動機の一例)

- ☆地震等の時はきっとパニックになる。学んでおけば、きっと役に立つと思ったから。
- ☆自宅には防災グッズが一つもない。備えをして、家族を守りたいと思ったから。
- ☆防災士になりたいと思っている。勉強したい。
- ☆将来、防災のことで地域を守りたいと感じているから。
- ☆新しい学びに期待しており、学んだことを学校や地域で広めたいと思っている。



手ぬぐいで作った指人形を手にした阿部さん。避難所の子供達の実顔を前にして笑顔で話している。

では実際、災害が発生したら、どうなるのでしょうか。

自助	…自分の身は自分で守ること
共助	…家族・近所の人たちと助け合うこと
公助	…行政・自衛隊等の公的機関が行う救助活動

大規模災害発生時、公的機関が行う支援は期待できず、わが身を守り、家族や友人・隣人で助け合うことが重要です。そんなお話をしてくれたのは、この日のゲストスピーカー、阿部紗弓さん。助産師という専門職をいかし、全国各地の被災地の支援に入っている阿部さん。災害発生直後の様子、時間の経過と共に変わる被災者のニーズを一つ一つ教えてくれました。参加者が高い関心を寄せる一つに「避難所」があります。規模は様々ですが、プライバシーのない空間に身を寄せ合う光景は想像できます。ただ、長引く「避難所」生活をどう乗り切っていくのか…。特に小さな子ども達、ご高齢の方々には「避難所」の環境が心身のダメージに直結します。通路を確保したり、トイレの距離に配慮したりとできる工夫を施したいものです。



私たち一人ひとりができる配慮、そして工夫はたくさんあります。参加者一同を釘付けにしたのは、阿部さんが紹介する災害時に役立つ“即席手づくりグッズ”の数々。長引く可能性がある「避難所」生活を少しでも快適に過ごすためのアイデアが満載です。

避難所で支給されるタオルケットを使った単(ひとえ)仕立ての羽織物は、屋外にある仮設トイレの使用の際の寒さ軽減に思いついたもの。風呂敷を使った肩掛けバッグは、貴重品を入れてのちょっとした移動に便利です。阿部さんの手にかかれば、身近にあるものがあつという間に優しさ溢れる“防災グッズ”に大変身。この“魔法の手”には会場から拍手があがりました。家庭に備えておきたい防災グッズと合わせて、不便な生活の中では皆が知恵やアイデアを出し合い、寄り添い、乗り切ることの大切さを学びました。



タオルケット羽織の帯に使うのは、女性用ストッキング。伸縮性のあるストッキングは便利一品だそう。



2つの風呂敷を結び合わせる即席バッグ。紐の長さを調整できる優れもの。しかも“かわいい”！

東日本大震災、熊本地震の実態について、実際に足を運んだ「普及会」のメンバー、ゲストの阿部さんからたくさんのスライドを用いて教えてもらった参加者。ここで伊藤さんから、参加者に考えて欲しいとある問題が！

問題 ここは避難所。あなたは乳児を連れのお母さんです。赤ちゃんがひどく泣き出しました。あやしても泣き止みません。外は寒く、雨も降っています。どうしますか？

① 避難所に残る ② 外に出る

参加者はインスピレーションで選択します。



参加者に感じて欲しかったのは、避難所には色々な事情を抱えた人が身を寄せ合っているというイメージ。「独りぼっちにならないことが大切です」と伊藤さん。もし、遠慮して出ていこうとするお母さんがいたら、「外には大きな車がありますよ。」と一声かける配慮があれば、母子の処遇は全く変わる可能性があります。そう、「排除の避難所」ではなく「受容の避難所」をつくっていくことが大切です。実はこの考え方が「トリアージ」に通じるものだと感じました。根底にある「排除」ではなく、「受容」の精神。一人でも多くの命を救うために求められる公正な「選別」のスキルです。今一度、説明すると、医師、看護師や救急救命士が患者への医療の優先度を決定し、限られた人員・物資の中で人命を救う手法が「トリアージ」です。ただ、大規模災害発生時、地域の救助力は圧倒的に足りません。一人でも多くの命を救うための、「市民が行う優先搬送トリアージ」の必要性が叫ばれているのです。



「市民トリアージ」は単独では行いません。訓練を受けた市民が「市民トリアージ」を行います。「普及会」では市民がトリアージをする意義や方法を啓発する活動を熱心に展開しています。この日は、一つのきっかけとして「応急手当」の一つである「直接圧迫止血法」の紹介がありました。

多数の負傷者を前に訓練を受けた市民が、重症度に基づいて、治療の優先度を決定して選別を行います。命の危険が迫っているケガ人を優先して搬送治療すること、病院の混雑を避けること、軽傷者と至急搬送が必要な重傷中等傷者をいち早く見つけることが大切なのです。一概には言えませんが、「歩ける人」「歩けない人」を目安にして、「歩ける人」に対して「応急手当」を行い、その後の経過観察までを行うという一連の流れを聞きました。

直接圧迫止血法の手順

- ◆素手で血に触らない。ビニール袋を手袋代わりに。
 - *「私の手が汚れてるから」の一言が相手への優しさに。
- ◆直接タオルで圧迫。その際は心臓より上に手を挙げて。
 - *顔色チェック忘れずに！大切です！！



参加してくれてありがとう！



「周りの人の力を借りて、みんなで助け合いたいと思った」、「寄り添うことが大切だと思った」参加者から寄せられた感想です。傾聴姿勢や配慮、事前の備え等、「市民トリアージ」には広い意味があります。短い時間の中で大切なエッセンスを感じあえる貴重な学びの場でした。「今日がスタートです。勉強したことをいかしてください。」最後に伊藤さんからこんなメッセージが送られました。減災・防災への大きな一歩になることを期待します。

講演会から学ぶ



未曾有の東日本大震災から6年。その教訓を生かそうと「東日本大震災を経験して～大切な命を守るために～」と題した講演会が去る12月14日、今治市総合福祉センター（愛らんど今治）であった。多くの犠牲者を出した宮城県名取市閑上（ゆりあげ）地区で復興支援に携わる「防災教育の市民団体 ゆりあげかもめ」会長佐竹悦子氏が登壇。佐竹氏は震災時、名取市閑上保育所の元所長として、保育所の子ども達54人と職員10名全員を津波から守り、無事に避難させた経験を持つ。「閑上の奇跡」とされた事例から学ぼうと、保育士を志す学生、現役保育士を中心に今治市民ら約150人が聴講した。佐竹氏は「日頃の危機意識と訓練がないと“奇跡”は起きない」と強調。参加者からは、「リーダー不在時にも機能した瞬時の判断に感銘を受けた」「日頃の防災意識の大切さを学んだ」等の声が寄せられた。

名取市閑上地区に最後に津波が来たのは、昭和8年3月3日。時間の経過と共に住民の中には「閑上に津波は来ない」というのが口頭伝承となった。理由の一つに閑上地区の海岸は砂浜海岸だからというものがある。確かに津波被害が大きくなるのはリアス式海岸とされる。そんな中、平成23年3月11日15:44、地震発生。約1時間6分後に津波が閑上地区を飲み込む。市の防災無線が壊れていたこと、一度は避難した人が「大丈夫」と自宅に戻ったことなどの不運が重なり、閑上地区の多くの尊い命が奪われた。

佐竹氏が所長を務めていた閑上保育所は海拔0m、漁港からは260mに位置している。夏には浜辺に遊びに行くのが園児の日課だった。そんな立地の中、一人の犠牲者も出さずに済んだのだ。それは最悪の危機を想定し、園のマニュアルを職員皆で共有していたからに他ならない。地震発生から9分後の14:55には2km先の小学校に避難を開始。

「逃げます→車を持ってきてください→小学校で会いましょう」。10名の職員がこのシンプルな掛け声で園児を連れて逃げた。職員自身がマニュアルを作成し、それに基づき訓練をしていたから成せた行動だ。そして根底にあるのは保育士の使命。「朝、預かった園児の命を守り、お返しする」。この使命を胸に行動した信念は会場の参加者の心に深く響くものとなった。

いつ起こってもおかしくない南海トラフ地震を前に「今治市は大丈夫」と考えている今治市民は多くないだろうか。災害の際に「まさか、災害に見舞われるとは…」との声を聞く。実際、自宅、学校、職場などにより、防災への備えも千差万別だ。自分や家族、そして地域が非常時におかれた時、どう行動するのか。「家族で防災会議をして欲しい」。締めくくりにおくられた佐竹氏からのメッセージ。自分の命を守るために。大切な人の命を守るために。防災意識を常に高めておくことが重要であることを強く意識させられた講演会だった。



▲熱心にメモをとりながら、聞き入る参加者。

●閑上保育所の実践●

最悪を想定した“マニュアルの検証”

- 1 集合場所：臨機応変な対応力
- 2 役割分担：園長不在等の時も機能するものへ
- 3 多様な避難訓練の実施：全ての時間帯をチェック
- 4 避難場所の直接確認：園内外、避難場所の安全
- 5 避難経路の確認：渋滞等回避ルート、危険箇所
- 6 非常持ち出しの数と内容：職員1人に1個
- 7 備蓄の確認：分散備蓄を
- 8 養護を忘れない



熊本地震被災地支援ボランティア活動 参加者募集

「自分も何かしたい!」「被災地のお手伝いしたい!」と考える方、ご参加ください。

場所：熊本県嘉島町

期間：平成29年3月3日(金)～3月5日(日)

■行き：3月3日(金) 8:30頃

今治市民活動センター集合（今治市別宮町8-1-55）

■帰り：3月5日(日) 22:00頃

今治市民活動センター解散 ※交通状況により変更があります。

■対象：18歳以上の男女

（未成年のみの参加：「参加同意書」をご提出いただきます）

■費用：現地での食費・宿泊費などの諸経費（実費）は自己負担となります。

（交通費・ボランティア活動保険料を主催者が負担します。）

みきゃん応援隊

平成28年度熊本地震被災地支援ボランティア

愛媛県では基金等を活用し、愛媛県社会福祉協議会が主体となって行う「みきゃん応援隊」として、ご参加いただく災害ボランティアの皆さんがまとまって1台のバスに乗り込み、被災地に一緒に向かいます。

●お問合わせ先●

今治NPOサポートセンター

〒794-0026 今治市別宮町8-1-55

TEL/FAX 0898-34-8515

E-mail imanpo@nifty.com

